生者たちの統治　3 月 26 日の講義

文責:H 松

1. 前回の講義の復習・・・「従順さ」(P321-P322L8)
   - ✓ 修練者におのれの意志に打ち勝つことを教えること
   - ✓ そのために完全で徹底的で恒常的な従順さという体制を取らせること

   →修練者が、ファミリタースという名を持つ**自己放棄**へと到達するはずだ！
2. 今回の講義のポイント・・・三角形の組織と組成(P322-P333)
   - ✓ 第二節に見られる重要なこと 2 つ

   (1)他者への従属と自己への検討の間にある結びつき

   他者の言うことを聞くためには、自分自身を見なければならない。

   (2)自己自身を検討しなければならないという義務においてきわめて奇妙な連結があること

   自分自身を見張り、自己自身の内で生じていることに目を開くこと＝見る義務

   私はすべてを私の内に見なければならないが、私が私の内に見るものをすべて語らなくてもならないし、**それも見るたびごとに語らなければならない。**

   キリスト教の指導・・・相互に結びつき、依存しあっている三つの要素がある

   ①終わりなき従属の原理

   ②たえざる検討の原理

   ③網羅的な告白の原理

   →今日研究したいのは、この三角形の組織と組成。
3. カッシアヌスの著作(P333)
   - ✓ カッシアヌスにとって重要だったこと・・・修道士が二つの危険から同時に逃れるようにすること

   ①第一の危険:自分自身への小さな甘えから、魂に忍び込む気の緩み

   例:貪欲さについて

   貪欲さは、修道士が手許に置いた物に対するほんのちょっとの所有の感情から生まれる

   ↓これらの記述について、平凡な主題でしょ？という指摘もありえるが。

   古代哲学者とカッシアヌスの違い:古代で言われている中庸の原理のようなものに、**ディスクレーティオー(識別)という名**を与えている。

   ✧ ディスクレーティオー(識別)

   ①分離する能力、混在しているものを**分離する能力**を示す＝一方への行き過ぎと他方への行き過ぎという二つの危険の間に正しい線を引くことを可能にする分割線を見出すこと。

   ②判断を可能にする活動のこと＝中心に身を置き、**過剰なものと不十分なものを見て取る**こと。

   →このディスクレーティオーという概念は、平凡でありながらも、キリスト教のキー概念になった。

   ↓なぜか？これから説明していく。
4. ディスクレーティオーという概念について(P333-P338)
   - ✓ キリスト教徒、とくにカッシアヌスにおいてハッキリと、特別の重みを付されている語
   - ✓ カッシアヌスが挙げる例＝修練の行き過ぎ、修道生活や修練の実践の厳格さを示している。
   - ✓ ディスクレーティオー不在の痛ましい結果＝極めて明確な反修練(＝修徳、禁欲)的な攻撃を備えている。

   →ディスクレーティオーは修練生活の原動力やその増幅原理ではなく、修練の抑止や抑制や節度であるべき。

   ディスクレーティオーが生まれた背景:明確な歴史的文脈がある
   - ✓ 4 世紀に発展し、制度化した修道制が乱暴な強化に対する対抗策として発展した経緯をもっていること。

- ✓ ディスクレーティオーは、修練とその規則を教会そのものの体系内部に引き入れることが求められていた背景から生まれた。
- ✓ ギリシア人がディーオス・アネールの名で呼んでいた、古き継承を払いのける必要性。
  - ✧ ディーオス・アネール・・・
    神的人間・**完全な人間**・大きな権力を持っていて他の人間に与えられた権力を凌駕し、みずからの内の神的な現前に由来するいくつかの効果を**自分と他人に生み出せる者**

↓どのように、カッシアヌスはディスクレーティオーを語っていたか

- ✓ 『共住修道制規約』の共住制が使徒を起源とすると説いている部分
  - ✧ 修道院に集まった使徒たちの話

各人が好きなように詩編を朗唱していては、いつか内部闘争になる危険があることに気が付く、
詩編の一般的な限度として課すべき詩編の数はいくつなのかを議論しようとする。
議論の場に、知らない修道士が 1 人現れて、詩編を朗唱しはじめ、12 個めを歌ったときに、ハレルヤを歌いながら立ち止まって、消える！実は、天使が舞い降りて、限度を決めてくれていた。
→使徒たち＝最も高貴な霊性をもった人々、にも関わらず、**その人の霊性だけでは節度の原則を自分たちだけで決めるには不十分だったことを示す**例。
→ディスクレーティオーの原則、**両極端なものの中庸が彼らに課せられ、それが受け入れられるためには、神の介入が必要だった**といえる。
→**人間において、本性的（＝自然的）で内在的なディスクレーティオーはない**、ということになる。
ここが、古代のディスクレーティオーとカッシアヌス（キリスト教）のディスクレーティオーの根本的な違い。
↓
古代の賢者・・過剰なものと過少なものを区別できる可能性を、**おのれの内に持っている理性としてのロゴスに負わせる。**＝みずからに、**みずからのみにおのれの尺度**を求めていた。
判断の邪魔をするもの・・・情念（でも、一時的に目をくらませるだけ）
キリスト教徒・・おのれの内にある何かにその尺度を見出すことができなかった。＝**おのれの尺度を自分自身に求めることができない。ディスクレーティオーが不可欠になる。**
面倒なこと・・・ディスクレーティオーが人間に欠けていたと言わなければならないこと。

↓ディスクレーティオーが人間に欠けている意味を説明しなければならない。

5. ディスクレーティオーについての問題（P338-P342）

- ✓ 第一の問題：なぜディスクレーティオーは人間に欠けているのか、ディスクレーティオーの不在の様態はどのようなものか。
- ✓ 第二の問題：ディスクレーティオーの不在をどのように取り繕えばよいのか。
- ✓ 第一の談話：ヨアンネス司祭の例

司祭は、世界中の君主たちが助言を求めにやってくるような人物。
しかし、より大きな完徳に達しようと、過剰な断食を行ってしまう。
悪魔がやってきて「お前に断食をせよと言ったのは俺だ」と言う。
君主に忠告を与えている人物ですら、自分の断食の節度を知ることができなかったという話。
この話から見えること：
古代の賢者・・世界の秩序を統御したり支配するのを欲するのをやめて、自分の視線と権力を行使できるわずかな支配地だけは確保＝**自分自身だけは自分で支配する。**
キリスト教の聖者・・世界のすべての君主たちに忠告を与えることができる。**誰か他人に頼らなければ、自分**

がなすべきことが見落とされてしまう。

↓

このような自分自身に対する闇や不確実さは、いったい何のせいなのか。

→この話によると、悪魔のせい。

聖性がこのうえなく高い段階でも、悪魔は手をゆるめない。

悪魔は、もっと断食をしなければという考えが自分自身ないし神からやってきたと思えたその場所に隠れている。

→**カッシアヌスには、人間の内なる悪魔の存在という神学**があった。

①悪魔の存在をけっして払いのけることはできない

②悪魔の存在は、主体自身の内で形作られ、主体性と縺れあっている

↓それでは・・・

- ✓ 悪魔の存在は、どのように形作られるのか？

人間の精神は直接にはひとりの悪霊や悪霊たちに捕らわれたり、取り憑かれたり、攻め込まれたり、浸透されたりはしない＝**侵入などはない。**

悪霊・魂は、本性を同じくする二つのもの

魂は、なされた教唆がその人自身から来たのか、サタンから来たのか、神から来たのかを区別することさえできない。

悪霊が身体の内に共―存在し、魂そのものと似ている類似的なものであるため、悪霊の行動様式は魂に幻影を生み出し、いずれにせよ善悪の区別、サタンと神の区別、サタンと主体自身との区別のなさを創り出す

魂における悪魔の作用の根本容態は情念、パトスではなく、幻影・欺瞞・誤謬。

キリスト教の聖性・完徳・・・自分自身、自分自身の内に起こること、**自分や良心にやってくる観念**などに向けられている

見極めなければならないもの・・ **事物の価値ではなく、良心の秘密**

ディスクレーティオーにおいて重要なこと・・・自身に対して不透明であるかぎりにおける、主体自身に働きかけること

→主体自身は、ディスクレーティオーを持たない。

- ✓ 第二の問題

自立的なディスクレーティオーが欠如していることをどのように補うか

検討―告白の構造・装置によってなされる。

古代の検討：**行われた行為を対象**にする

キリスト教の検討：つねにコーギターティオー、コーギターティオーネス、**思念が問題で、検討は行為ではなく思念に向かう**

修道士の目的・・・観想 →コーギターティオーが修道生活の中心問題であるのは当然

6. ロギスモスについて（P342-P344）

- ✓ 古典ギリシア語のロギスモス・・・推論、すなわち真理に到達するために**ロゴスを活用する方法**を指す
- ✓ キリスト教の語彙・・・ロギスモスは、真理に到達させてくれる肯定的なロゴスの、肯定的な使用ではない。

ロギスモスは何かしら疑わしいもの、究極的には否定的なもの。

ロギスモス＝不確実な要素を備えながら精神に到達する**思念**のこと

カッシアヌスの著作の発言をみて分かること：

神自身についてしか考えてはならないのに、**何かについて考え始めただけで、否定的な役割が生じる。**

修道士にとっての大きな危機・・・情念の混乱ではなく、**思念の混乱**
コーギターティオー＝キリスト教徒の検討の第一素材
↓
検討の役割・・・たえず移ろう精神において、なんとか切り抜けること

7. 検討について（P344-P349）
   - ✓ 検討の行使方法：カッシアヌスの比喩

①水車の比喩・・・水（精神）が流れることそのものは、重要ではなくそういうもの。水車はいい種も悪い種も挽く。修道士、検討をする者の役割は、この思念の流れの中で選別を行い、思念が良い種を挽き、悪い種を挽かないようにすることだ。
②百人隊長の比喩・・・受け入れるべき兵隊とそうでない者を選別し、どのような任務を与えるかの選別もする。
③両替商の比喩・・・硬貨と別の硬貨を交換するとき、その価値を推し量ること。
↓これらの比喩から、検討の役割がみえてくる。
後からの監査ではなく、思念の現在性に向けられているということ。
思念をまさにそれが現れる瞬間に捉えること、意識（＝良心）の内に受け入れるべきものと、意識の外に投げ捨て、排除すべきものを、できるだけ早く弁別してしまうことを課題にするもの。
↓フーコーの疑問：そもそも、両替商は何をしているのだろうか。
両替商の役割・・・貨幣の金属を確かめる者・その本性や純粋さを確かめる者・刻印を確かめ、貨幣の出所を調べる者
第一の可能性：観念が哲学的言語のきらめきを伴って表れてくる
第二の可能性：ある観念が良質の金からできているように思えるが、刻印が付け加えられている
第三の可能性：観念は有意義な形で現れ、金属も良質で、刻印も正確に思われるのに、これが悪しき工場の製品で、口にできないような恥ずべき目的のために作られている
第四の可能性：すべてがよい。刻印が正確で、金属も良質で、よい工場から来たものであるが、錆や摩擦があって薄れてきていて、重みも完全ではなく、錆にむしばまれている
→両替商の事例をみていくと、**検討が向かうべきものが、観念の種・実質・期限・表徴そのものになっていることがわかる。**
→欺かれていないか、誰かに、誰か他人に欺かれていないか、**私の内に他人に欺かれていないかを知ることが問題**になっている。
⇕
ストア派の検討：**行為を検討し、真理の問題も提起**する。行為の分析と誤謬の測定。
キリスト教の検討：問いかけは観念の対象的内容には向けられず、**不確実な状態にある自分のうちの観念の物質的実在性に向けられる。自分の観念が真かどうかは、まったく探求されない。**
→自分の観念の真理の問題ではなく、思考する自分の真理の問題。
→ここに、真理と主体性の歴史における重要な屈折点がある！

- ✧ デカルトの例：「私が欺かれるためには、私があるということがあるのだ」
  →私が間違えていないということは確信できても、私が欺かれていないと確信させてくれるものは何もないということこそが根本的。

8. 告白の機能（P349-P353）
   - ✓ フーコーの疑問：ディスクレーティオーを備えていない人間がどのように選別（区別）できるのかという問題

→ここに介入してくるのが、告白という概念。

✓　キリスト教の霊性が告げること・・・

「お前はつねに自分自身において間違えるということがあり、お前の内にはお前を欺きかねない何かがあるのだからお前は語らなければならない、告白しなければならない。」(P)

告白・・・**誤りを正してくれるもの**

告白すると、他人が忠告してくれたり、指示してくれたりする。

フーコーの指摘：**カッシアヌスにとっては、このことは重要ではない。**

→告白が信頼すべき識別を与えてくれるのは、私が話しかける他人が信頼できるからではなく、**私がある他人に話しかけるという事実だけ**によってなのです(P350,L1-2)。

↓なぜか。3 つの理由がある。

①思念が良質で、その起源も純粋で、善意志によってのみ私の内に発せられたら、容易に告白できるから

＝恥の基準

②悪しき思念は実のところ、告白されなければならないくらいなら、引き下がり、さっさと逃げ去ってしまうことを好むから

③語るということ、口から言葉を外に出すということ、それだけで追放の行為、物質的追放の行為であるから

→舌の上にあるものは、すでに心の内にはない。

↓つまり

語ること・・・**分別、選別、悪しきものの追放等の原理を作っているのは、「語る」という事実だけ**

告白・・・師の教育的要素や医学的役割は主要な要素ではなく、**誰かに語るという事実が重要。**

＝言語化の形式

↓

人間には本性上欠けているディスクレーティオーに不可欠なメカニズムを、告白の形式そのもので回復できるならば、告白が永続的で恒常的なものであることを意味することになる。

↓だから

・魂の内で展開していることを、まるごと言語化する必要性

・コーギターティオーは言葉にならなくてはならず、言説になる必要性

・たえず自分自身について、自分自身を対象に言説を繰り広げていく必要性

が生じる。

→常に自分自身に心を傾け、思念が良心に現れてくるまさにその始まりにおいて、それを言説とし、誰かに向けて発話することで、やっと、自分自身の節制＝ディスクレーティオーが回復されるという図式に。

・悔い改めとの違い

悔い改め・・・**行ったことを語ることを要求**される。自分が罪人であるという事実を、態度や断食や衣服等、**現出させる**ことが求められる。

自己自身の言説化・・・身振りや衣類の態度など劇的で派手なところはない。**自分自身を解読するような自分自身になることが求められる。**

古代の指導：主体が恒常的に**行為の裁判をなさしめることを目的**としていた。自分に対して**法的な力**を及ぼすことが重要。主体の自立を目的とする行為の裁判。

キリスト教の指導：他者の意志に対する従順さの関係を打ち立てること、その従順さの条件として、裁判ではなく**真理陳述とでも呼びうるもの**を打ち立てることが重要。

自分自身に関して恒常的に真なることを語ること＝告白の形式

真理陳述を道具として、他者に従順になること

9. 告白・真理・主体性（P353-P354）

✓ 従順さに結びつく永続的な告白は、きわめて重要ないくつかの法則に従っている。

①無限に深めなければならないという法則・・自分自身の心の奥底で注意に値しないようなどんな小さなこともない。

②外化の法則・・・外在性と従順さの関係において展開するのが必要であること

③秘密への屈性や傾向性の法則・・・自分自身の奥底に他者を暴き出すこと

④真理の生産の法則・・知られていなかった真理を生産することこそが重要

✓ 「真理を生産し続ける構図＝キリスト教的主体性の図式」（P354）

自分自身の意志＝他者の意志（※自分の意志を完全に放棄）

↓

自分自身を放棄しなければいけないからこそ、自分自身の真理を生産しなければならない。

↓

自分自身の真理を生産できるのは、自己自身の放棄をしつつあるからだ！

＝真理の生産と自己放棄の結合

✓ 自己の真理の生産・・・やっとのことで自分が何であるかを存在において確立するという意志には向けられておらず、それと連動してもいない。自分が何であるかを知ろうと思い、自分が何であるかを真理として生産しなければならないのは、自分自身がそうであるものを放棄すべきだから（P354, L14-15）。

10. 講義のまとめ（P354-P359）

✓ 3 つのことを指摘して、講義を終えたい。

（1）キリスト教的主体化の練り上げ全体、自己放棄による自己の真理陳述は、完徳の主題との比較ないしは対比においてなされたということ

キリスト教が行ったこと・・・

①神の認識と自己認識を切り離した。→**神を見出すのは、自分自身の奥底ではない。**※悪魔がいるから。

②良心の不確実な秘密に侵入するという終わりなき課題を設定した。＝**神を信仰するという義務と自己自身を知るという課題を、異なった形式として連結**した。

（2）主体性と真理の関係は、キリスト教のさまざまな制度的領域において、さまざまな形をとること

①洗礼における魂の試練

②悔い改めにおける自己開示

③良心の指導における良心の探索

→3 つの同じ要素の関係がある。

①【死】：自己を苦しめ押さえるものとしての死

②【他者】：語りかけられる相手である他者＝X あるいはサタンという見出すべき＜他者＞

③【真理】

↓しかし、**指導は、洗礼よりも悔い改めよりも重要。**

指導が 3 つの要素の関係を打ち立てるのは、話さなければならないという義務、語らなければならないという義務、自分自身について真を語るという義務、それも限りなく語り続けなければならないという義務、こうした義務を通過することによってであるから。

＝**私たちは、私たちについて真を語るために、私たち自身について語る義務**がある。

→**自分自身を言説化すること、それこそがキリスト教西洋における主体性と真理の関係の組織の主要な力線**

の１つであった。

↓つまり･･･。講義冒頭のオイディプス王の例を振り返りつつ論じると･･･。

現在の私たち･･自分自身の真理を発見することを強いられるために、王である必要も、父親を殺してしまっている必要も、疫病を制圧する必要もない。**誰であろうとよい。**

＝誰しも、自分自身の真理を発見することを強いられている。

↓この強制は、誰から････？

真理を発見することを求めてくるもの･･･疫病に襲われた人民の誰もそんなことは求めない。求めてくるのは、私たちが属している制度的なシステム全体、文化的システム全体、宗教的システム全体であり、**そしてやがては社会システム全体がそれを求めてくるでしょう**（P357- P358, L1-2）。

↓

真理を語ることを強いられた私たち････王である必要も、奴隷を尋問する必要もなく、**自分自身を尋問しさえすればよい。**他者への従順さの構造、だれでもいい他者への従順さの構造の内部で自分自身を尋問しさえすればよい。

（3）自分自身について真を語るという義務による真理/主体性の関係の制度化、この結びつきの組織化は、ある種の権力の形式の存在や機能なしには考えられないが、今年は研究しようとしなかったこと。＝研究の課題であるということ

セプティミウス･セウェルス･･･頭上に世界の真理を映し出していたが、生命と死に関する部分だけは隠されており、自身の権力についてお伺いを立てていたのは、自分自身の真理のみを隠していた世界の真理に対してだった。

キリスト教徒･･･自分自身の真理を除けば、世界の真理をもっていない。自分の奥底に真理があり、その深い秘密に繋がれ、終わることなくこの秘密に立ち合い、この宝を他者に示すことを余儀なくされる。キリスト教徒の労働や思念や注意や良心や言説が、この宝を取り出し続ける。＝自分自身の真理を言説化することは、従順さの最初の形式の一つとなる。

11. H 松の感想･疑問

･真理を発見することを求めてくるものとして、フーコーは「やがて社会システム全体がそれを求めてくるでしょう」と論じているが、コロナ禍のマスク着用の議論などがこれにあたるのではないかと考えた。コロナになった人が「なぜお前はマスクをしないのか？」と毎回追及してくるわけでもないのに、マスクを着用できない人は、「私はこういう障害があるので」などと、事細かに説明をしなければならない場面が生まれていたように思う。

･P358 でフーコーが第三の論点として提示した事項について。「ある種の権力の形式の存在や機能なしには考えられませんが」、とあるが、これは生権力のことを示唆しているのだろうか。